



夢のあとさき



上月ゆひろ

序

「ねえ、あなた。お願いがあるんですの」

唐突に、彼女がそう言ったのは、結婚式を十日後に控えた休日。久しぶりの休日だからゆっくりしようかと、今はもうさほど珍しくもなくなった街のカフェで、僕が2、3口コーヒーを飲んだときだった。

「なんだい？ 君が頼み事なんて珍しいね。言っごらん」

「あの、連れてって頂きたいところがあるんですの」

若い女性のあいだで、短い髪と膝丈のスカートが流行りはじめている中、いまだきっちりと着物を着こなす彼女が、胸の前で両手を合わせて、可愛く拝むような仕種をしてみせる。

「何処だい？」

「私が昔住んでいたところなんですけど」

その村は、ここから20kmほど北西にある、小さな村だ。山の麓で、空気が澄んでいるため、昔から結核の療養所がある。

「会いたい人がいるんですの。会えるかどうかわからないけれど……会って確かめたい事が、あるんですの」

「確かめたいこと？」

「ええ……」

ちょうどコーヒーを飲み干したので、僕は伝票を持って立ち上がった。

「行こうか。話は道すがら、ゆっくり聞かせてもらうよ」

「勿論ですわ。でもあなた……聞いても怒らないでくださいね」

「ほお。すると君は、僕を怒らせるような話をするつもりなのかい？」

「そ、そんなつもりはありませんわ。ごめんなさい」

「いや、冗談だ。気にしないでくれ」

上流階級のステイタスであるかのような、小型の自家用車に乗り込んで、エンジンをかける。「あれは、もう10年以上も前のことで、私が14になる時のことなんです、私はあのとき、本当は死んでるはずだったんです。それが今、生き長らえてこうしてあなたといられるのも、その方のおかげなんですよ……」

車がゆっくりと動き出すのとほぼ同時に、彼女・刈穂星は、ゆっくりと話しはじめた。

広い家だった。

そして、白い家だった。

私・刈穂セイが13歳の今まで暮らしていた家には、そんな印象があった。実際に白いわけではないのに、私の記憶のなかで、かつての家は白いイメージのなかにあった。

両親はほとんど家にいることがなく、私はお手伝いの芙実さんと二人で暮らしていた。生まれつき胸を病んでいた私は、広い野原に面した縁側のある部屋で、本を読むことと、布団のなかから草原に咲く草花を愛でることくらいしか楽しみのない毎日を過ごしていた。

「ねえ」

「きゃっ！」

布団から上半身だけ起こし、壁を背もたれがわりにしながら、いつものように本を読んでいると、縁側から身を乗り出すようにして、少年が話しかけてきた。私が14になる年の、ある春の日の昼下がりのことだった。今日は天気が良くて暖かいので、野原に面したほうの戸は開け放しておいた。病気の私のところには、遊びにくるような友達もいなかったし、第一村の外れの、しかも私のうちの裏にあたる場所だから、ここに人が来るとは思ってもなくて、私は思わず悲鳴を上げてしまった。

「あ、ごめん。驚かすつもりはなかったんだけど」

少年は一度立ち上がって、恥ずかしそうに謝った。私も驚いたとはいえ、悲鳴を上げてしまった失礼を詫びて「何しに来たの？」と聞いた。

「何しに、ってわけじゃないけど……僕、あっちの街から来たんだ」

と少年は、野原の向こう側を指さした。少年が指さした方向には、かなり大きな街があると聞いていた。私の両親も、そこで働いている。

「この家が最初に見えた家だったから、それで声かけただけなんだけど……」

「そう」

この家は、村の入口付近にあるから、なるほど、それならこの縁側の部屋に来たのも頷ける。だけど私は、街からの来訪者を歓迎する気にはなれなかった。

「表通りに出て突き当たりの家が村長さんのお宅だから、ご挨拶していくといいわ。それから、もうここへは来ないでね」

できるだけ、優しく言ったつもりだったけど、突き放すような感じがしたかもしれない。

「どうして？」

「……病気が伝染るから」

少年の問いに、私はちょっと考えてからそう応えた。

「ふーん……」

少年は、残念そうに肩を落としたが、すぐに顔を上げて

「僕、ホシって言うんだ。また来るね」

「えっ？ち、ちょっと待ちなさいよ！」

私が慌てて少年を止めようと縁側に出たときには、すでに少年の姿はなくなっていた。

「.....ったく、もう.....」

また来るね、って、あの子、人の話ちっとも聞いてないんだから。しかも「ホシ」ですって？
この村でその名は禁忌なのに.....。

「どうなすったんです、お嬢さん？」

お手伝いの芙実さんの声で、私は我に返った。

「ううん、何でもないの」

ピシャンッと硝子戸を閉めて、部屋に戻る。

「という割には、嬉しそうでございますね」

からかうように、芙実さんが言う。嬉しそう？ どうして？

「お嬢さんが、私以外の者と話すのは、本当に久しぶりですものねえ」

確かにそうだ。病気だから、と家を一步も出ず、芙実さんと月に一度帰ってくる両親、それに半月に一度検診をしてくださるお医者様以外、私はほとんど顔を合わせていない。同じ年頃の子と話をしたのなど、何年ぶりだろう。でもそれは嬉しいことなんだろうか？「そうね、楽しかったわ」

私は笑って、そう相槌を打った。

☆

☆

☆

翌日、ホシ少年は再び私の部屋の前にやってきた。昨日の私の忠告は、はかなくも無視されたわけだ。

彼が、昨日と同じ縁側に来ていることには気づいていたが、私は硝子障子を閉めたまま、気づかないふりをした。彼は、しばらく縁側に腰掛けて、私が気づくのを待っていたようだが、夕方になると帰っていった。

.....もう来ないだろうな。

私はほっとした。

しかし、予想に反して、ホシは翌日もやってきた。次の日も、その次の日も、そのまた次の日も.....。毎日毎日こりもせず、私の部屋の前にやってきては縁側に腰掛けて、私が気づくのを待ってるようだったが、私は頑なに彼を拒みつづけた。

そんな日々が、十日ほど続いただろうか。ある日、ホシは来なかった。やっと諦めたか、とほっとした反面、あれだけ毎日来ていたのに今日だけ来ないとすると、何かあったのかと心配になってきた。

本当に来てないのかなあ.....

私はそっと硝子障子を開けて、縁側に降りてみた。すると

「やあ」

「！」

驚いて声のしたほうを見ると、ホシは部屋の中からは見えない、縁側の端に座っていたのだ。

「やっと君のほうから開けてくれたね」

その言葉から、私はようやく、彼の作戦にはまってしまったことに気がついた。顔が、かっと赤くなっていくのを感じた。

「待ってたんだよ」

彼の笑顔も、人の悪い嗤みに見える。私は金魚のように、数回口をパクパクさせて

「何しに来たのよ！」

という叫びを絞り出した。

「何しに.....って遊びに来ただけど」

悪びれもせず、ホシは言う。

「この辺りってさ、子供少ないし、だから、他の子の所にも行ったんだよ。だけど、なぜか皆して僕の名前聞くなり遊ぶのやだって言うんだ。君もそうなの？」

「わ、私はっ、病気だからっ、来ちゃだめって言ったじゃない」

「でも、村長さんが言ってたけど、君の病気って他人に伝染るものじゃないでしょう？」 その通りだった。私が患っているのは心臓であり、私自身が安静にしてなければならないだけで、別に他人に害はない。ただ、私が他人と接するのが嫌だったのだ。それは、

「ど、どうせっ、どうせ私は死ぬんだからっ！ 死ぬ人間になんかかまわないでよ!!」

ピシャン！

叩きつけるように言って、私は戸を閉めた。背後で、ホシが何か言っていたが、聞こえなかった。

いつのまにか頬が濡れていて、嗚咽がこみ上げてきた。

泣いてる……どうして？

どうして？ 私、気づいてしまった。

思い出してしまった。

「どうせ死ぬ人間」

自分で言って思い出した。そうだ、私ってもうすぐ死ぬ人間なんだ。

この心臓の所為で。

何時止まっても、明日止まってもおかしくないこの心臓の所為で。

それに……それに、私は今年14になる。だから……だからもう、私はあと何ヶ月も生きられないんだ。

「どうせ、死ぬ人間」

そうだよ。忘れてた。

だから……だから避けてたのに。

人と会うの、避けてたのに。

話をするの、避けてたのに。

楽しいとか、嬉しいとか、思わないように。

生きたいなんて思わないように、生きることに執着しないようにしてたのに！

……気づいてしまった。ホシの所為で。

私、嬉しかったんだ。そう、多分嬉しかったんだ。ホシが、毎日飽きもせず、この縁側に来てくれてたこと。それを莫迦にしながら、私、ホシを待ってたんだ。

そんなこと……気づきたくなかった。

こんな感情、忘れていたかったのに。

生きたいなんて、思っちゃいけなかったのに！！

☆

☆

☆

「あ、気が付いた？」

ふと目を開けると、ほっとしたホシの顔があった。その向うに、見慣れたぼけた天井。

「少し興奮されましたね。軽い発作ですよ」

そう言いながら、芙実さんが薬を持ってきてくれたのが、目に映った。身体を起こして、それを飲む。そっか、先刻泣いちゃったから、発作起こしちゃったのか。

「大丈夫？ ごめんね、泣かせるつもりなかったんだ。ごめん、本当にごめん」

今にも泣き出しそうな顔で、ごめんを繰り返すホシを見ても、「ホシの所為じゃないよ」とは言えなかった。

「……ごめん、今日はもう帰って」

私は再び布団に横になって、ホシから顔をそむけた。今は、ホシの顔を見たくない。

「……………わかった。今日は帰る」

沈んだ声でそう言って、ホシが立ち上がり、帰っていく気配を背中に感じて、軽い罪悪感が胸をよぎったが、それを振り払うように、ぎゅっと目を瞑った。

「お嬢さん」

ホシの帰っていく足音が完全に聞こえなくなるのを待って、芙実さんが言った。

「あの子、ずっとお嬢さんのことを心配してたんですよ」

先刻のような言い方は、可哀想じゃないですか、というのだ。それは判ってる。だからなのか、叱るでも諭すでもないいつもの優しい芙実さんの言葉に、自分がひどくいけない子になったような気がした。

「……ごめんなさい」

「その言葉は、私じゃなくてあの子に言っておあげなさいな」

「でも……」

また、来てくれるだろうか？

「きっと来てくれますよ。その時に、謝ればいいじゃないですか。……さあさ、お嬢さん、今日はもうお休みなさい。体に障りますよ」

「……はい」

布団の中で、再び目を瞑った私の頭を、芙実さんが優しくなでてくれる。それが心地良くて、まもなく私は眠りの淵に落ちていった。

「ごめんなさい！」

三日後。前日と前々日と2日続いた雨が、嘘のような快晴が広がっていた。ホシは来てくれるだろうかと、不安を感じながらも、とにかく待ってみようと、私は硝子障子を開けた。そして、その不安が、杞憂に終わったことに気づいた。つまり、ホシは既にそこにいたのだ。そして、目が合った最初のお互いの言葉が、それであった。重なった言葉に、私たちは顔を見合わせて、同時に笑った。

「待ってて。今お茶とお菓子を持ってくるわ」

「うん。ありがとう」

話したいことがいっぱいあった。2日間、考える時間だけはたっぷりあった。

「あのさ」

お茶とお茶菓子を持って私が戻ってくるのを待って、ホシが言った。

「こないだは、本当にごめんね。そんなに傷つけるつもり、なかったんだ」

「もういいよ。私も.....突き放すような言い方しちゃって、ごめんね」

「うん、いいよ。.....ところでさ、君が言ってたあれ、『どうせ死ぬ人間』って、どういうこと？」

「どうって.....言葉どおりよ」

いきなり核心をついてきた質問に、ちょっと戸惑いながら、私は言った。決して嘘をついたつもりはなかったが、ホシは納得いかないという顔をしたので、続けて言った。

「私の心臓にはね、穴が開いてるのよ。手術出来ないわけじゃないんだけど.....受けられないの」

「どうして」

「15に成ってからじゃないと、体力が持たないってお医者様が.....。でも、その前に、私、15歳まで生きられないから」

「どうして」

先刻より、強く咎めるように、ホシが言う。

「この村には、古くからの言い伝えがあってね。毎年14歳になる子供が死ぬの。毎年、一人選ばれて、山の神様に捧げられるのよ。そうすると、その一年は天気も良くて作物も良く実り、平穏な生活がおくれると言われてるわ」

「それって、人身御供ってこと？」

「まあ、そういうことね。で、今年は」

「それが、セイってことなんだね」

そう、とうなずいて、私はお茶を一口飲んだ。

「でも.....どうしてセイだって判るの？」

「あれよ」

短く答えて、私は神棚を示した。そこには一本の白い矢が置かれている。持っていいかと聞くので、私は許可した。手にとってしげしげとそれを見ながら、ホシが言った。

「白羽の矢が立った……という冗談のつもり？」

「冗談としては出来が悪いし、本気としたら更に性質が悪いわね。どちらにしても、選ばれた子の家に、その矢が届くのよ」

「ふーん……」

矢を元の場所に戻して、ホシは再び縁側に腰をおろした。お茶菓子を一つつまんで、
「で、何でそれを僕に話してくれたの？ あれだけ僕を拒否してたのに」

意地悪そうに目を細めて笑い、彼は言った。何を期待しているか明白だったから、私も嗤って返した。

「言えばもう来る理由がなくなるでしょう？」

とたんに、彼の顔が暗くなる。

「じゃあ、やっぱり、僕が来るのは迷惑なの？」

「……そうよ。あの矢がある以上、私の寿命は決まったも同然だし。未練がましく『死にたくない！』なんて、叫んだりするのは、私の性に合わないわ。この上は、静かにその日を待つのが得策だと思うの」

最近揺らぎ気味だったその決心を、自分自身に言い聞かせるように、ゆっくりと言った。

「だからね、こんな風に話すのも、今日が最後ね。もう、来ないでよね」

「……わかった」

意外なほどあっさりと、ホシは了解した。「じゃ、僕、帰る」と立ち上がろうとするので、逆に私のほうが驚いてしまった。

「え、もう？」

「うん。……もう、って何で？」

「え？ あ、ああ、そうよね、……そうよね」

自分でも、何故驚いたのか判らず、意味不明な返事する。

「じゃあ、帰るね、さよなら」

「あ、待って」

縁側から立ち上がって、帰りかけたホシを、私は思わず呼び止めた。

「何？」

だが、何故呼び止めたのか、判らなかった。

「う、ううん。何でもない。……気をつけて」

「うん。……さよなら」

今度こそ、ホシは帰っていった。その後姿を、私は何とも言えない気持ちで見送っていた。

一週間が経った。あれ以来、ホシは姿を見せていない。それまで、毎日のように来ていただけに、私は拍子抜けしてしまった。

今日も、ためしに縁側を覗いてみても、誰もいない。私はふう、とため息をついた。

なにを、期待しているのかしらね、私は。

自嘲めいた笑いが、口の端からこぼれた。何の事はない。私は、ホシが来るのを期待していたのだ。ホシがこのこのこやってきたら、「来ないでって言ったじゃない」と言ってやるつもりだったのだ。

何をやってるんだろう、私は.....

再びため息をついて、読みかけの本を開いてみたが、ちっとも読む気にならない。何処か落ち着かない。何かをしたいのに、何がしたいのかわからず、何もする気にならない。ただ、だらだらと無意味な時間を過ごしていた。

10日目。相変わらず、縁側に人影は現れない。7月に入り、日に日に気温は上昇し、夏晴れが続いていたが、私自身は、すっきりとしない気分が続いていた。

何気なく視線を漂わすと、神棚とぶつかった。そして、白い矢。

「芙実さん」

「なんです、お嬢さん？」

「夏祭りって、いつだっけ？」

「.....8月の1日ですよ」

「そう.....」

私の命も、後一月弱、か.....。そう思うと、妙に悲しくなった。

.....何か.....嫌だなあ.....

何が嫌なのか、はっきりしなかったが、ふとそう思った。今までそんなこと考えなかったのに。選ばれた以上、潔く死ぬのがカッコいいと思ってた。だからこそ、だからこそ、誰とも会わず、楽しいことも面白いことも知らず、全ての事から、生きることにすら執着しないようにしてきた。ホシの事も、追い返した。

ホシ。

そうだ、あの子の所為だ。あの子が来たから、私、楽しいってこと、思い出しちゃった。ホシが来てくれるの嬉しかったし、ホシと話すのが楽しかった。でも、ホシがいなくなれば忘れられると思った。だから、追い返したのに.....どうもダメだったみたいだ。

私は縁側に座って、晴れわたった空を見上げた。雲ひとつない青空。

「.....ホシ.....」

ホシはここで、いつも何を見てたんだろう。こんな風に空を見上げたたんだろうか。そういえば、そもそもあの子は、どうしてここに来てたんだろう。何を考えてたんだろう。今、何を考えてるんだろう。

.....会いたいな

ふと、そう思った。ホシに会いたい。会って、また話がしたい。だが、……会えるのだろうか。来るなと言ったのは私だから、来てくれるはずないし……。

「なら、会いに行かれたらよろしいじゃないですか」

芙実さんの何気ない言葉は、私の意表を突いた。会いに行く？ 私が？ もう何年も、外に出てない私が、外へ？

「山の入り口に神社があるのを覚えてますか、お嬢さん？ その近くの家だそうですよ。お嬢さんの足でも、15分もかからないですよ。今日は天気も良いですし、行ってきたらいかがですか？」

にこにこ、芙実さんが言う。行って、みようか。私は、何年かぶりに、家の外へと出かけることにした。

☆

☆

☆

何年かぶりに歩く道を、迷いはしないかと不安だったが、意外と覚えているもので、ホシの家は簡単に見つかった。山の入り口には、山の神様を祀っているのだという神社の鳥居があり、その鳥居から数メートルのところにある小さな家が、ホシの家だった。木の引き戸の玄関の前に立ってみたが、きっちりと閉まっていたので、扉を少し開けて声をかけようとしたが、扉は動かなかった。

いないのかなあ……

一応裏口までぐるっと回ってみたが、人影は見当たらない。

仕方ない、出直すか。

私は短くため息を吐き出して、あきらめて歩き出した。来た道を、ではなく、神社の鳥居に向かって、である。この神社が、例の夏祭りの舞台になるのだ。死ぬ前に、一度ゆっくり見ておきたいな、という好奇心から、私は鳥居をくぐり、心臓に負担をかけないようにゆっくり階段を上り始めた。

緩やかにうねる、さほど長くもない階段を上りきると、祠と参堂を兼ねた少し開けた場所に出た。小さな祠に祀られた神様の名前を私は知らなかったが、これまで何人もの子供の命を喰らってきた神様を、崇める気にはなれなかった。そしてまた、一月後には私をも喰らおうとしている。そう思うと、背筋がぞくりとした。

早く帰ろうと踵を返しかけた私の目に、祠の左隣にある大きな御神木が映った。祠を覆い隠すほど葉が生い茂り、幹は大の大人が4人手をつないでもなお足りないほど太い。樹齢何百年と言う単位だろう。この神社と並んで、村のシンボルであった。

その御神木の根元で、何かが揺れた。そっと近づいてみると、人影だとわかった。逆光で良く見えないけど、あれは……。

「……ホシ？」

「セイ?!」

やはり、ホシだったようだ。近づいた私を見つめて、彼は大きく目を見開いた。

「どうして、ここに……」

疑問と驚きに混じって、今更なんだと言う皮肉が込められているようで、私は慌てて踵を返し、走り出した。

「あっ、待って」

ホシとの間は、それなりに有ったはずなのに、何歩も走らないうちに、ホシの手が私の腕をつかんだ。

「走っちゃだめだよ。また発作起こしちゃう」

その声が、この前のように優しい響きだったから余計に私は、彼の顔を見る事ができず、とはいえ腕をつかまれてるので帰る事もできず、ただ黙ってうつむく事しかできなかった。

「なんで逃げるの？」

「……軽蔑してるんでしょう？」

「え？」

「あれだけ身勝手に、来るなって言ってたくせに、自分からのこのこ会いにきた私を、軽蔑してるんでしょう！？」

「どうして？」

食って掛かった私に、ホシはキョトンとした顔で応じた。そして、すぐにその顔をほころばして、

「会いに来てくれたの？」

「なっかな何言ってんの。違うわよ」

慌てて否定したけど、それが逆に肯定してしまってるような気がする。恥ずかしさに、私は再び顔を背けた。

「嬉しいな。僕もセイに会いたかったから」

私は驚いて、思わずホシの顔を見た。

「のど乾いたんじゃない？ 家においでよ。とっておきのお茶を出すよ」

にっこりと微笑って、ホシは歩き出した。

困った。

ホシがあまりにもにこにここと嬉しそうに笑うので、毒気を抜かれて、悪く云うと見とれてしまっ
て、思わずホシの家にお邪魔してしまったけれど.....どうしよう。困った。何を話せばいいの
だろう。ホシが出してくれたお茶を飲みながら、私は借りてきた猫のようにそわそわとして、い
たたまれなかった。

「楽しんでくれていいのに」

対して、ホシは上機嫌だった。

「このお茶ね、茉莉花茶って言ってね、温かいけどさっぱりするから、今くらいの時期にいいん
だよ」

と、教えてくれた。確かに、そのお茶は、なんだかすがすがしい気分にしてくれる。

「さっき.....」

「え？」

「先刻、あの樹の所で、何をしてたの？」

先刻、御神木の下にいたホシ。まるで、樹に抱きついているように見えた。私がそう聞くと、
ホシはちょっと困ったように頬を掻いた。

「別に.....何をしてたわけじゃないんだけど。僕、あの御神木が好きでね。それに.....こんな村
のはずれで、しかも一人でしょ。だから.....なんかあそこへ行くと落ち着くんだよね」

「ふーん.....」

「あ、神社って言えばさ。もうすぐだね、お祭り」

「.....うん」

気にしていることを突かれた、動揺を隠して肯く。

「あれ、セイが選ばれたのって、偶然じゃないんだね」

「.....」

私が黙っていたが、ホシは勝手に続けた。

「選ばれる子供の名前には、『星』の文字が入っているんでしょう？」

「.....そうよ。それがこの村、『星名村』の名の由来でもあるわ。でも、それがどうしたの？」

「え？ ううん、何でもない。あ、それよりさ、この一週間、何してたの？」

ホシは、急に話題を変えた。自分はこの一週間、あの御神木の下へよく行っていたとか、セイ
の家に何度か行こうとして、その度にやめたんだとか、街での暮らしは便利だけど自分には会わ
ない感じがしたとか、逆に今はのんびり出来ていいとか.....、他にも色々な事を話してくれた。
まるで、一週間溜め込んでいた会話を一気に吐き出すかのように。初めは気の無い返事をしてい
た私も、だんだんと彼の話に関心が入って行って、会話に身を乗り出してる自分がいた。

気が付くと、部屋を西日が赤く染め上げていた。

「やだ、もうこんな時間。帰らなくちゃ」

慌てて立ち上がる。

「送ってくよ」

と言ってくれたホシと並んで、夕闇迫る道を歩き出した。そういえば。

「そういえば、こうやって並んだこと、なかったね」

ちょうどそう言おうと思った時、ホシの口から先にその言葉が出てきた。同じ事考えてたんだ。そう思うと、なんだか嬉しくなって、そうね、と私は笑って言った。

ホシは私より10cmくらい高くて、並ぶとちょっとだけ見上げる格好になる。長めでさらさらな髪と、白い頬が、夕陽に赤く染まっている。改めて見ると、ホシの顔は、何処か能面のような中性的な匂いがした。

「どうしたの？」

しかし、この能面は表情が豊かで、今も満面の笑みを私に向けてくる。

「ううん。なんでも」

と、首を軽く横に振って、私はようやく視線をホシからはずした。

「どうもありがとう」

家の前に着くと、私はホシに御礼を言った。

「今日は、楽しかった」

「僕も。……また、遊びに来てもいい？」

「ええ」

私は即答した。今まで、ホシを避けることばかり考えていたのに、この時は、私も素直に、また会いたいと思ったのだ。

☆

☆

☆

それからの毎日は、それまでの生活からは想像もつかないくらい、楽しく心弾む日々だった。ホシは結局、あれからほとんど毎日、私の家を訪れてくれた。縁側に並んで、一日中話をしたこともあったし、ビー玉で遊んだこともあった。時には野原に下りて、花冠を編んだり、シロツメクサの4つ葉を競い合って探したりもした。

毎日楽しかったし、明日が楽しみだった。今まで、死ぬ日のことばかり考えて、家に一人閉じこもってきた日々が、もったいなく感じた。

残された日を、思い切り楽しんで過ごす。それが、未練なく死ぬ道だと思えるようになった。いや、正確には、そう思い込もうとしていた。

本当は、死にたくなんか、ない。

自分に、8月から未来がないなんて、ホシと過ごす日々が、あと数日で終わってしまうなんて、どうしても考えられなかった。考えたく、なかった。

だけど、現実には、あの白い矢がある以上、私の未来は変わらない。8月1日の夏祭りの日に、生贄として山の神の下へ逝く。拒んだら、もっと多くの人死ぬことになるかもしれない。小さな村だけど、この風習が村を支えてきたのだ。拒むことは、できない。

あの矢が、無ければいいのに……

何度もそう思った。

その、矢の異常に気がついたのは、7月の半ばのことだったと思う。

「……芙実さん」

「何です？」

「矢、持ってる？」

「え？ いいえ。神棚にありますでしょう」

「それがないのよ」

「ええっ？」

私の前には神棚があるのだが、そこに、いつもは異様なほどの存在感を醸し出していたあの白い矢が、なかった。芙実さんも台所から戻ってきて、私の隣で神棚を見上げると、「おやまあ」と驚きの声を上げた。

「昨日までは、あったのを見たんですけどねえ」

「何処かへ落ちちゃったのかなあ」

「探してみましよう」

と、二人で家中をくまなく探したが、結局見つからなかった。そもそも、矢はただ単に置いてあったわけではなく、飾るための脚のついた金具の上に固定してあったのだ。そんな簡単に落ちるはずもない。いったいどこに行ったのか、矢は唐突にわが家から消えたのだ。

選ばれた証である白い矢が消えた！　なんて、なんて素晴らしいこと！　あの矢が無ければいいと、何度思ったことか。ああ、ほんとに夢のようだわ。あの矢がないなんて。それってつまり、私が生贄として死ななくていいって事だもの！　死ななくて済むんだわ。少なくとも、村の慣

習なんて莫迦げたことのために、死ぬ必要はないんだわ！

やって来たホシに真先にその事を報告すると、彼は目を丸くして「本当！？」と言って、神棚のところへ飛んでいった。そして、自分の目でその事実を確認すると、満面の笑みを私にくれた。

「じゃあ、これでセイが死ななくて済むんだねっ」

「そうよ。これからも、こうしてホシと会えるのよ」

私たちは手を取って、それこそ踊りださんばかりに喜んだ。

だから、そのときは気づかなかったのだ。私が死ななくてすんでも、村の掟が変わらない以上、誰かが死ななくちゃいけないってことに。そして、その「誰か」が実は一人しかいないってことに。

☆

☆

☆

7月31日。夏祭りを翌日に控え、村はその準備に沸いていた。私は、とあることを思い出して、ホシの家まで出かけることにした。それに、いくら矢がなくなったからと言っても、本当に私が死ななくてすむ保証はどこにもなかったから、不安だったのもある。待てれば、ホシは私の家に来たであろうが、それすら待ちきれず、私の方から出かけていった。

「やあ、セイ」

ホシの家と私の家のちょうど中間くらいで、ホシと出会った。胸の奥が、ずきっとした。ああ、でも聞いてみなくっちゃ。私は、ホシから少し視線をはずして、聞いた。

「ねえ、ホシ」

「なんだい？」

「ホシは今いくつ？」

すると、ホシはちょっと驚いたように、目をくりっとさせて応えた。

「14だよ」

そのとき、私はどんな顔をして、ホシを見ていただろう。鼻の奥が痛くなって、何かがこみ上げてくる。私はホシの手を取り、彼の家まで急いだ。手をつないだ所為で走ることはできなかったけど、途中何度も制止しようとしたホシの声は聞こえなかった。

予感の半分が的中してしまった。けどまだ半分だ。その半分が外れてくれればいいけど……。祈るように、私はホシの家の玄関を開けた。

「！」

「ねえ、ちょっと、いったいどうしたんだよ、セイ」

「あれは何よ！」

「あれ？」

私が指差したのは、壁に打ち付けられた飾り棚のひとつに飾られた物だった。白く細長いそれは、先端が尖り、反対の端には羽がついている。紛うことなく、十日ほど前まで我が家にあった、選ばれし証の白い矢だった。

「いつから?!」

私は、それこそつかみ掛からんばかりに、ホシに詰め寄った。

「えっと……十日くらい前、かな」

「十日……って、それじゃ私の家から矢が消えてすぐじゃない！」

何てことだろう。嫌な予感が当たってしまった。この村には、14歳の子供も、星の名を持つ子供も、私しかいなかった。そこへやってきたのが、ホシ。同い年くらいの、やはり禁忌の名を持つ少年。せめて14歳じゃなければ、と願ったがそれもむなしく、山の神は、その触手の矛先を私からホシへと変えたに過ぎなかったのだ。

「どうして言ってくれなかったの?!」

「どうしてって……言ったってどうしようのないじゃないか。それにセイだって言ってただろ。選ばれた以上、潔くその日を待ったほうがいいって。だから、潔く待つことにしたんだ」

「したんだ、って、どうしてそんなあっさり言えるの?! 死ぬのよ?! 明日になったら、その先がなくなっちゃうのよ?! 怖くないの?!」

「そりゃ、ちょっと怖いよ。けど、村の為だもの、仕方ないよ」

「村の為に言ったって、あなたこの村に来て何日も経ってないでしょう? なのに、村の為なんてよく思えるわね」

「だけど、セイだってそうだったでしょう」

強い意志とかすかなせつなさが入り混じった声で、「落ち着いて」とホシは私の肩を2、3回たたいた。いつのまにか、ぽろぽろと涙がこぼれていた。促され、半ば倒れこむようにして私は、玄関先に座り込んだ。靴を脱ぐのももどかしく、足を土間のほうに下ろしたままで、2、3度深呼吸をする。心臓が、悲鳴をあげていた。私は、聞こえないふりをした。

「セイだって、元々街に住んでたんでしょ? この村に来たのは、4、5年前でしょ?」

「そうだけど……、5年と1カ月じゃ全然違うじゃない」

「違わないよ。少なくとも僕にとってはね」

「だけど……だけど、嫌! ホシが死ぬなんて絶対に嫌!」

「どうして?」

ホシが聞いた。どうして?

「だって……せっかく仲良くなれたのに。これからも、ずっと一緒にいられると思ったのに……酷いよ、ホシ、そんなの酷いよ!」

泣きじゃくりながら、私はホシの胸をドンドン叩いた。だけど、ホシは何も言ってはくれなかった。

一通り激情が行き過ぎるまで泣いて、泣き止むと、胸が締め付けられるように痛かった。発作を起こさずにすんだのは、いつからかホシが片手で私を抱きしめて、片手で髪をなでてくれたからかもしれない。それでも、胸の痛みは続いていた。心臓じゃない、肺でもない、ただ胸の奥が張り裂けそうに痛かった。

長い沈黙の末、私はホシの手を離して、考えてた結論を搾り出した。

「……私が逝く」

「逝くって、セイ?」

驚いた顔で、ホシが私を見る。

「明日の夏祭り、私がホシの代わりに逝く」

「ダメだよ、そんなの!」

「どうして? 元々は私だったのよ。……私、ホシに死んで欲しくないもの。ホシには、生きて欲しいんだもの。この村で、14歳の星の名を持つのは、私たち二人だけだもの。あなたを逝かせない。だから私が逝くの」

「嫌だよ、セイ」

きっぱりと強い声で、ホシが言った。今までに聞いたことのない声音だった。

「今セイが言った言葉、そっくりそのまま君に返すよ。僕はセイに死んで欲しくない。セイには生きていて欲しい。だから、僕が逝く。第一、矢は今僕のところにあるんだから」

ホシの言葉は嬉しかった。とてもとても嬉しかった。だけど、相変わらず胸の痛みは治まら

なかった。私は、部屋に上がると、飾り棚の上の白い矢を奪い取った。

「これを……私が持てれば、選ばれたのは私でしょう」

「セイ！」

バツと、ホシが私の手から矢をもぎ取った。再び奪い返そうとしたが、ホシも素直には渡してくれない。上へ後ろへ、ホシは必死に私から矢を離そうとして、私も必死にそれを追いかけた。

「危ないだろ！」

ホシが私の手から逃れようと、身をよじって声を荒げる。

「ホシが渡してくれればすむのよ！」

私がそれを追いかけて、言い返す。

「その矢を、渡しなさい！」

「嫌だよ！」

「どうして！」

「どうしても！」

二人とも、もう叫び声だった。

そんな奪い合いと言い合いがしばらく続いた。

「そんなに死にたいの？」

ホシが、肩で息をしながら言う。

「死にたくなんかないわよ！」

叫び返す私の息も、すっかり上がってしまっていた。

「だけど、だけどそれ以上にホシを死なせたくないの！」

「僕だって、セイに死んでほしくなんだよ！」

「私はっ、私はホシが好きだから、ホシに死んでほしくないの！」

「僕だって、セイが好きだから、セイを死なせたくないんだよ！」

荒い息を吐きながら、その瞬間、私たちの動きは止まった。私はホシの顔を見つめながら、自分が今言った言葉と言われた言葉を反芻した。

「……本当に？」

息を整えてそう言ったのと、苦笑とも微笑とも取れる笑いを顔に浮かべたのは、二人ともほぼ同時だった。

「じゃあ、こうしよう。明日まで二人でこの矢を持ってようよ。明日までどっちだか判らないけど、時間になれば判るんだ。それまで一緒にいようよ」

「判った」

私は肯いて、その場に座り込んだ。

☆

☆

☆

その夜は、とても月が綺麗だった。私たちは何をすることもなく、何を話すこともなく、ただ並んで月を見ていた。

長い夜だった。私は、私たちの最初で最後のこの夜を、ひどく緩やかに流れていく時間を感じていた。明日になれば、こうして二人でいる時間は、永遠に失われてしまう。一分一秒でも長く、この時間を続かせていたかった。だからかもしれない。

ホシが煎れてくれた茉莉花茶を飲みながら、私たちはお互いのぬくもりを感じて、ただ寄り添ってその時間を過ごした。

空が白んでくるころ、ホシがぽつりと言った。

「もうすぐ、だね」

「ん……」

私はホシの肩に頭を寄せながら、のろのろと応えた。頭が余りはっきりとしてなかった。

「もっと……一緒にいたかったね……」

「大丈夫だよ」

優しく、ホシが私の髪をなでてくれる。それが、たまらなく心地良い。

「僕じゃなくても、きっといつか、セイと一緒にいたいと思えて、セイと一緒にいたいと思ってくれる人が現れるよ」

ふいに、身体が宙に浮いた。ホシが、眠そうな私を抱き上げて、布団まで運んでくれたのだと気づくのに、だいぶ時間がかかった。

頭の中に、白いもやがかかっているようだった。でも、意識だけははっきりしてる。眠たいような感じだが、普通の睡魔とは違う何かを襲ってきていた。

「ホシ……？」

立ち上がりかけた彼の腕を、とっさにつかんだ。けどどうしたことか、手に力が入らなくて、ホシは私の手をすり抜けて行ってしまった。

「だから……セイ、君はこれからも生きていかなきゃ、こんな所で死んじゃダメだ」

「い……や、よ……ホシ……」

その言葉が何を意味しているかわかった。なのに、声が出なかった。

嫌よ、ホシ、貴方が死ぬなんて、絶対に嫌！

そう叫びたいのに、声が出ない。追いかけて引き止めたいのに、起き上がることすらできない。どうしてこんな……。

「ごめんね、セイ。……これは夢だよ。起きたときには、みんな終わってる。嫌なことは全部なくなってるから。だから……おとなしく寝てなさい」

「ま……さ……ちゃ……」

まさか、先刻のお茶に何か入れたの？

そう聞きたいのに、ちゃんと発音できない。まぶたが重たくて、目を開けているのも苦痛だった。行かないで。

ホシは静かに扉を開け、そして静かに扉を閉めた。
行かないで……逝かないで！！

「.....私が再び目を覚ましたときには、本当にすべてが終わっていました。ホシはいなくなり、祭りも終わっていたんです。信じられますか？ 私は丸一日眠ってしまってたらしいんです。私は、私を探しに来てくれた芙実さんに起こされたんですが、芙実さんにホシはどうしたのか尋ねました。すると、判らないと言われたんです」

街のカフェを出てから小一時間、僕は車を走らせながら、星の話に聞き入っていた。そろそろ、目的の村も近い。

「祭り.....というよりむしろ儀式ですが、それはホシによって行われたそうです。一応は滞りなく、ホシを乗せた神輿が村を一周し、その後祠に収められました。ところが、その晩、急に天候が悪化し、神社に落雷があったそうなんです。.....あ、この辺りで止めていただけますか」

ここからは、車は通れないので、と言われた僕は、車を路肩に寄せ、村の入り口に降りた。そこは道路というより畦道で、右には野菜の、左には麦の畑が広がっていた。見渡してある民家は3、4件で、それぞれ離れて建っていた。文化の中心地から、わずか20Kmしか来てないとは思えないほど、静かな風景が広がっていた。

「ここが.....星名村です」

星にとっては、やはり思い出深いのであろう。感慨深そうにそう言い、景色を見渡していた。

「行きましょう」

歩き出した彼女の後を、僕は慌てて追いかけた。

「どこへ行くんだい」

「神社です」

「というと、その、落雷があったと言う？」

「そうです」

彼女の足取りはしっかりとしていて、とても一年前まで心臓を患って入院していたとは見えないほど、軽快で心持ち速かった。とはいっても、僕が置いていかれるほどではなかったが、やはり気はやるのか、これまで僕が共に歩いたそのどの時よりも、その速度は速かった。

「その落雷ですが.....雷は、神社の祠を直撃したそうです。信じられませんでした。祠の隣には、そこを覆うように葉を広げていた御神木があったというのに、その御神木には傷一つなかったというのですから。ですが、実際自分で行ってみると、確かに祠は焼け落ち、御神木は無事でした」

歩きながらも、彼女は話を続けた。僕は適当に相槌を打ちながら、その隣で歩を進めた。

「すぐさま私は、ホシのことが心配になりました。祠には、彼がいたはずでしたから。ホシはどうしたの、どこに行ったの、無事なのと芙実さんに再度尋ねましたが、判らないと言われました」

「それは、つまり.....」

「祠の焼け跡から、ホシの遺体は見つからなかったということです」

「じゃあ、そのホシ少年は生きているのかい？」

「私も、最初はそう思いました。何処かから抜け出して、無事にいるんだと。ところが……」

「ところが？」

「祭りから何日経っても、ホシは姿をあらわさなかったのです。そればかりか……ああ、そこが、当時ホシが住んでいたはずの家なんですけど」

と、彼女が示した右手の家は、小さなからぶき屋根の少し傾きかけた家で、半分閉まりきっていない木戸には蜘蛛の巣が張っていた。それに気をつけながら中をのぞいてみると、埃だらけの土間と汚れた畳が目映った。梁の所々にも蜘蛛の巣が張られ、虫が付き、まさに廃墟と言うべきありさまだった。

「祭りの翌日、私が目を覚ましたときから、この家はこんな感じだったんです」

「何だって？」

僕は驚いて、思わず星を振り返った。

「さすがにここまで酷くはありませんでしたけど。少なくとも、昨日まで人が住んでたとは思えないくらいには、荒れていましたわ」

苦笑交じりに、星はそう付け加えた。

「一体どういうことなんだい」

僕はすっかり判らなくなってしまう。彼女の話も、彼女が会いたがっていたのが誰なのかも。

「私にも、はっきりとは判りません。それを確かめるために、今日ここへ連れてきて頂いたのです。……神社へ、御神木の所へ参りましょう」

僕を急かすように、彼女は先に古びた鳥居をくぐり、石段を登り始めた。僕も慌ててその後を追う。

「祭りの後、まもなく私は街の病院に入院し、それきりここへ来る機会もなく、今まで過ごしてきました。でも、ずっと気になっていたんです。あなたにお会いしてからも、ずっとホシのことが忘れられなかったのです。……あああなた、どうか誤解なさないで下さいませ。私は本当にあなたのことを愛しておりますし、私の心臓を直して下さったあなたにとっても感謝しておりますし、そのあなたと一緒にいれることを、心から幸せに思っておりますわ。ただ……そう思えば思うほど、この命をつないでくれたホシの事を、忘れることは出来ませんの」

「ああ……判っているよ」

面白くない感情が、少しだけ首をもたげたが、それを上回る愛情が、僕にその言葉を吐かせた。

「ありがとうございます」

彼女は一度振り返り、にっこりと笑う。その笑顔に、僕は僕自身の言葉に偽りが無いことを確信した。

「それから……私は一つの仮説を思いつきました。それを確かめるために、ここへやってきたのです」

数十段の石段を登りきると、そこには古い大きな御神木と、落雷に焼け落ちた後再建したのだろう、比較的新しい祠とが、僕らを待っていた。

星の言葉どおり、御神木は祠を覆うほどの葉を広げており、もしここに雷が落ちたのなら、間

違いなくこちらの樹の方が焼けたことだろう。だが、そんな跡はこれっぽっちも見えなかった。

星はその樹に近づくと、そっと幹に手を触れた。そして、

「ホシ……」

と、まるで樹の上に誰がいるかのように、しかし小さな声で呼びかけたのだ。

「ホシなんでしょう？ 私です。セイです。覚えてるでしょう？」

次の瞬間、僕は信じられないものを見た。御神木の根元に、白い光が灯ったかと思うと、それは徐々に大きくなり、人型になり、やがて一人の少年が出現したのである。

「やあ、セイ。ずいぶん会わないうちに綺麗になったね」

少年は、にっこりと星に微笑みかけた。

「ホシ……やはりあなたはこの御神木の精霊だったんですね」

「そんな立派なもんじゃないけどね。似たようなものかな」

「私のところへ来てくださったのは、私が死にたがっていたからですね？」

少年は満足そうな笑みを浮かべた。それは、成熟した大人の顔のようであり、無邪気な子供のそれのようでもあった。

「言っただろ。僕はセイに死んで欲しくないんだって。君はまだ死んでいい人間じゃないって。……死ななくてよかっただろ？」

「はい。前にホシが言っていた、私が一緒にいたいと思って、私と一緒にいたいと思ってくださる方にも会えましたし」

「彼？」

と、ホシ少年が僕に視線を投げてきたので、僕は思わずどぎまぎしてしまった。

「はい」

臆面もなく堂々と、満面の笑みで婚約者殿は肯いてくださった。それに答えるように、僕も微笑みを二人に返した。

「よかったね」

「はい。あなたには、本当に感謝しているんです、ホシ」

急に真面目な声色になると、星は少年に深々と頭を下げた。

「あの時、私の命を2度も救ってくださって、ありがとうございました。一度目は、私が生きることを諦めていたときに、二度目は、夏祭りのときに」

「そんな……御礼を言われるほどのことじゃないよ」

少年は、照れたように笑って、視線をそらした。そして、ふと思い出したように聞いた。

「セイ」

「はい」

「今、幸せ？」

「はい」

「これからも？」

「はい。幸せになります。ねえ、あなた」

「ああ」

僕らは顔を見合わせて、頷きあった。

「私は、生きます。これからも、生きていこうと思います」

「ああ、それがいい」

そういうと、少年の姿は忽然と消えていた。後には、風に葉を揺らし何か言ったような大きな老木だけが残った。僕らはそれぞれ新たな決意を胸に誓うと、顔を見合わせ微笑んだ。そして、どちらからともなく歩き出した。

FIN

夢のあとさき

<http://p.booklog.jp/book/4125>

著者：上月ゆひろ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/russiantea/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/4125>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/4125>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.